



豊橋市美術博物館友の会だより

-2011年-夏号 **Vol.80**  
**FU風伯HAKU**  
**Summer 2011**



## 人を感動させる芸術、果たす役割とは？

前号で、「私を感動させた一枚の絵」を執筆していただいた11人の中から、芸術を創造する立場の3人に、更に深くその“感動”の中味をお聞きしました。「美」は、この時代にいかなる意味を持つのかなど様々な疑問を投げかけてみました。「人はなぜ美を求め、美を感じるのか」シリーズも最終回です。あなたはどんな答えを出すのでしょうか。

### ■出席者

近藤恵子(こんどうさとこ・合唱指揮者、オペラ歌手)  
岡崎高校コーラス部、三河市民合唱クラブ、豊川コールアカデミー、岡崎混声合唱団を指導。世界合唱大会青年混声部門第一位ほか受賞多数。

藤本逸子(ふじもといつこ・短期大学教授、ピアノ演奏家)  
豊橋創造大学短期大学部教授。幼稚園・保育園の先生を目指す学生にピアノの実技を教えている。自身もピアニストとして演奏会に出演。

松井香奈枝(まついかなえ・アートコーディネーター)  
グラフィックデザイナーや作家に依頼し、子どもを対象とするワークショップなど、イベントを企画。様々なアートシーンを企画・紹介する立場。

司会:鈴木伊能勢(「風伯」編集長)  
編集部:神野能生子、金田順子、福島陽子  
大野俊治(豊橋市美術博物館主任学芸員)

まず、藤本さんと美術との出会いはどのようなものだったのでしょうか？



藤本逸子さん

藤本:美術大好き人間になったのは、落ち込んだ気持ちの時に、フラットデパートの画廊に入ったのがきっかけです。ある書家の作品があって、「こんな面白いものが世の中にあるんだ！生きなきゃ損よね！」と救われるような感じがしました。それから狂ったように絵を観たかな。複数の美術館の友の会に入って、画廊もくまなく観て歩きました。こんな楽しい世界があるのかと、生きる喜びとして絵を観るようになりました。音楽を専門にしていると、かえって音楽を純粋には楽しめないところがあります。純粋に楽しめるものに出会えたことは私にとっては救いだったんです。美術に関しては思ったことをそのまま言えて、本当に楽しいか、楽しいというか。私にとって美術は救いの神であり、欲びの神である、みたいなどころがあります。

藤本さんが、中村彝の《少女裸像》からもらう沸々と沸く勇氣・元気とは？

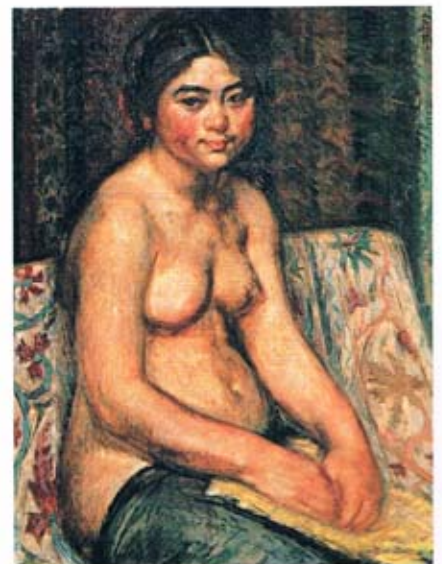
藤本さんが、中村彝の《少女裸像》からもらう沸々と沸く勇氣・元気とは？

藤本:根本的な生きるエネルギーです。愛知県美術

館が新しい建物になった時に何気なく行って偶然出会う、本当にあまりの素晴らしさにそこに止まってしまった。実は高校の時にムンク展で《思春期》に出会い、描かれた少女を見て「ああ、私がいる」と感じた経験をしています。当時、誰にも私は理解されてないと思っていて、蒼ざめたあの少女は鏡に映った自分の姿だと。出会う共感があり、救われました。生きる喜びになりましたね。《少女裸像》はそれとは正反対で、生命そのものの健康さが生きる喜びを与えてくれるという意味の元気です。ムンクの《思春期》とは、そのあと70年の大阪万博の美術館で再び出会いました。「ああ、あなたにまた出会えたわね」って、それ観たさに、万博会場に2、3回通ったんですよ。

司会:《少女裸像》を最初に観た時と今とでは、感じ方が変わりましたか？

藤本:最初の時は、笑って幸せそうに見えました。まっすぐで迷いのない目、赤いりんごのようなほっぺ、本当に若々しくて。私はピアノ弾



中村 彝「少女裸像」愛知県美術館蔵



きですから、太めの手首で「とてもいい手をしているな」と思いましたね。生命力そのもののように感じました。

司会:元気をもらうために絵を観に行くとのことですが、どういう時に感動したいと思われますか？

藤本:いつも感動したいですけど…(笑)。疲れが溜まると、人が旅行や温泉に行くように、私は美術館に行く感じなんです。

松井さんはどうですか？ムンクの《声》を観て、「静かに、でもなぜだか心に張りついた」と書かれていましたが、

注)《声》はムンクが恋に落ちた女性をモデルに描いた作品

松井:不意に、ムンクが感じていた不安定さみたいなものが絵から感覚として迫ってきて、そのまま私の心に伝わった気がしたんです。「ああ、こういう気持ち

だったのかな」と、絵と一緒に印象に残りました。

司会:絵は、「時に自分の心を写す鏡」とも書かれていますが、その時の心境はどうだったんですか？

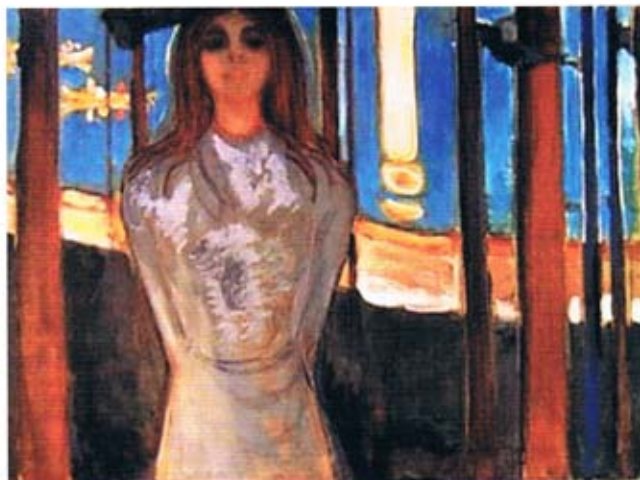


松井香奈枝さん

松井:恋をしていたとか、そういうことはないですが(笑)。「あ、こういう感覚って体験したことあるな」と。恋の喜びとともに不安が描かれているという解説を読んで、「ああ〜。そういうことなんだ」と納得しました。包まれた感じがして、その感覚に浸っていたい気分になったというのが近いですね。

司会:「これからも数々の美に出会う旅を続けていきたい」とは、具体的にどのような計画ですか？

松井:作家の方と関わりを持つなど、美に出会う色々な機会を大事にしたいという意味で書きました。もちろん鑑賞は大好きなので、美術館に行くことは続けていきたいと思います。先日ロスに3日間ほど滞在した時にもロサンゼルス現代美術館に行きました。高校生の時にはあまり好きでなく解らなかったポップアートですが、代表的な作品を観ているうちに、「あ、20代に入っ



エドヴァルド・ムンク「声」オスロ国立美術館蔵

たから解るのかな」と。実物を観て、美術は社会とリンクしているものなんだという感想を持ちました。

近藤さんにお聞きします。「感動とはハッとしたりガンときたり」というイメージだったのが、全く違う感覚で《睡蓮》に感動したと言われますが、どう違ったのですか？

近藤:どちらかというともネは自分に刺激を与えてくれる人ではなく、感動を求めてオランジュリー美術館に行ったわけではなかったんです。ところが出会って、身体が意外な反応をしたというか。「何てこった！」っていう感じでした。

大野:それは感動なんですか？癒されたんですか？

近藤:両方ですね。今まで数点の《睡蓮》を観る展覧会はあったけど、《睡蓮》の壁に囲まれるようには観たことがなかった。絵画の感覚ではなかったです。音楽に置き換えてみると、私は主張があり訴えがあるものに惹かれ、かなり新しいものに挑戦しています。でも美術や絵画にはそういうものを求めていない。熊谷守一が描く猫みたいな、ああいうのが本当にいいなあ〜って。中川一政のあのひっかいたような絵とか字を観ると、茫漠としていいなど。絵にも何通りって数え切れない読み方があると思います。

司会:このモネの絵には、今にして思うと、どうして感動したんですか？

近藤:体中全部を覆ってくれる優しさでしょうか。陽というか光、風、そういうもので包まれちゃった感じですね。私は実はピカソが好きなんです。ポスターの鳩の線の強さとか、コロッと作った素焼きのテラコッ





近藤恵子さん

が団体で入って来たり、そういう時間の経過もすべて楽しかった。

司会:ガンとした感動でなく、「救された」感じと表現されていて私の心に残りましたね。

近藤:私はものすごい劣等感の塊なんです。無茶苦茶忙しくて、その上にオペラをやり、いくつかの合唱団の指導をやり、発声学会にも入って、自分の力以上のことをやろうとしていたわけです。やりたいという気持ちのまま走りまわって、飢餓感というか、どれもちゃんと成し得たことが無いという劣等感、未達成感です。子ども達にも旦那にも悪いな、お母様には本当に悪いなという気持ちがいっぱいあって。でも《睡蓮》の前ではフワ〜ッと文字通り救された感じでしたね。



クロード・モネ「睡蓮」オランジュリー美術館蔵

震災で行事・イベントの自粛、取り止めが相次ぎました。文化や芸術は、こうした状況の中でどんな存在価値や意味があるのでしょうか？

藤本:口に入るご飯も大事だと思いますが、“心のごはん”って同じくらい大切だと思うんですね。芸術って心のごはんそのものだと思うので、現地で何か音を出すなり、美しいものを観てもらふことによって元気になって頂ける方法もあると思います。心のごはんの効用をもっと考えていくといいんじゃないでしょうか。

近藤:震災後に演奏会をしましたけど、黙祷をお願いしようとしたら、全員何も言わなくても立ってくださ

タが本当に良くて。でも2時間以上も我を忘れたというのは《睡蓮》だったものから。もうひとつのモネの部屋と行き来して、その間、絵画教室の小さな子ども達

いました。30秒間くらいの空白を共有し粟立つような感覚を持ちました。ひょっとしてあまり考えていなかった人も、その間は絶対折ったと思うんですね。曲を聴く時もそうした思いがよぎりながら聴いてもらえたんじゃないかと思うと、私はどうしてもやめるべきじゃないと思うんです。

松井:私も同感です。被災地にボランティアに行っている友人のツイッターで、子ども達が蔵書も全部流されてしまったので本が欲しいと。ある程度時間が過ぎると、絵本や写真集とかそういうものが欲しいという声を聞きました。直接命を助けるものではないけれど、人の気持ちを繋いで、保ち続けるために必要なものなんだと思いました。辛い時には好きな画集を見たりすると、私は一番リラックスして落ち着けます。そういう意味でも、自粛するべきではないと思います。

皆さんにお伺いします。絵に限らず、今までにどんなことに感動されましたか？

藤本:ショックという意味での感動は、今村昌平さんの映画「楢山節考」です。少し前までの日本では、食べられるか食べられないかとは、こういうことだったのかと。あと高校生の時、仲のいい旭丘高校美術科の友達に「おいでよ、面白いのをやってるよ」と誘われて、日展に行った時にびっくりしました。山があって、木

があって、冬の場面に「うわー」と。私自身最初の、絵に対する感動だったのですが、今にして思えば東山魁

夷の絵でした。それから美術館に行くようになったからムックにも会えたのだと思います。その友達に誘ってくれなかったら出会えてないかもしれないですね。美術そのものに。

松井:一緒にやっている人たちと関わっている時に生まれる掛け合いみたいなものが面白かったりします。

近藤:やはり声ですね。ビルギット・ニルソンという一昔前のスウェーデンのソプラノ歌手が、60歳過ぎて日本に来て、東京のNHKホールで聞いた時はその声の振動に感動しました。

大野:同じ絵を観ても感動する人間としない人間が



いますよね。音楽でもそうです。全員が感動するわけじゃない。どういう違いなんでしょうね。

近藤:アンテナを持っているかどうかではないでしょうか。頭が空っぽの状態というか、純粹さも大事じゃないかと思いますね。

司会:アンテナとは、具体的にどのようなものですか？

近藤:例えば私は声に興味を持っていて、フレデリック・フースラーの発声法を声楽発声学会で勉強しました。筋肉のこの部位をこう動かせばどう響いてボリュームが出るという見地から、素材そのものを身体で作るという過程を目の当たりにしました。演奏会に行けば「これが本当に鳴っているということだな」とか、深い声が発せられてホールに響くまでの過程を客観的に知ることができます。興味のあることを理解し知ることによってアンテナをあちこちに張れると思います。

大野:見方が違うっていうのはそれですね。視点が違えば見え方が違いますし、知識がないとそのものを見る力ができていないわけですから、人によって大きな違いが出てきます。

**藤本さんはいろんな感激を味わっていらっしゃいますね。他の人とどこが違うのでしょうか？**

藤本:違いがあるとすれば、美術館に行く回数や音楽を聴く量が多いとかでしょうか。もし美術に感激したいと思ったら「美術館に行きましょう〜!」「三度の飯より美術館に行きましょう」(笑)

大野:そういう人がいっぱい出てくれると嬉しいけどなあ(笑)

藤本:美術館に行ったことが無い学生が多い中で、本物に触れて欲しいと、学生を連れてこちらにお邪魔したりしています。音楽でいうなら、ホールで生で聴くのとCDで聴くのとでは大きな違いがあることは、実際に行かないと実感できないですし。

近藤:絵だって絶対そうですよ。写真版を見たって絶対ダメですよ。

藤本:ムンクの《思春期》は昔の県立美術館で観た時と、大阪万博の大きな会場とでは観え方が変わりました。天井の高さや壁の広さ、同じ空間で観ている人に

よっても変わります。絵を観る環境として、全部ひっくるめて感動への影響があると思うので、やはり量が必要じゃないですか？私が行った高校は、勉強のことは言わず、美術館に行け〜、音楽会に行け〜とばかり先生が言って、美術館の割引券を配ってくれました。それもあって美術館に行く機会が持てたと思います。10代の時に東山魁夷とムンクの絵にプラスのショックを受けて美術で救われた。10代の時のその思いがあったからこそ、4代になった時に救いを求めたと思います。中学・高校の頃に美術館に行くというのは大切なカギかも知れない。

司会:美術に感動する人間としない人間がいるのはどうしてでしょう？

松井:好きかどうかはもちろんあると思いますけど、



私が美術に感動している横で、他の人は別のものに感動しているかもしれないです。私は幼い頃から豊橋市美術博物館が大好きで、父と一緒によく観に来ていました。豊橋公園ではスモック姿にベレー帽で風景画を描いている絵描きさんが、本当に素敵で恰好よかったです。小学校4年生までに美術館に連れて行かれた経験のある子どもは、大人になってからも美術館に行くという調査結果も出ているそうです。あいにく学校の美術や図工の時間は減らされていますが、感覚を磨いて自分の意見を持つのは必要なことだと思います。

**近藤さんと藤本さんは、自ら発信して感動を与えるお仕事ですよね。どう思って指導や演奏会をされていますか？**

近藤:申し訳ないことに、私は自分の“好き”という感覚でプログラミングしています。心の底からステキで面白いと思っている曲をやりたいと考えています。あるコンサートは毎年、最高だと思っている武満徹の《さくら》で締めくくっていますが、信長貴富という作曲家の編曲も、音から受ける風景があまりに違うので、



どうしてもお聞かせしたいと思い、アンコールで両方演奏しました。武満徹の《さくら》が極彩色だとしたら、信長貴富の《さくら》はピーンとした違う色のさくらを感じとって頂いたようで反響がありましたね。

藤本: 酒井国作という作曲家の「間」をテーマにした《ぶれあんぶるむ》というピアノソロ曲のシリーズの初演を、12年間、毎年やっていました。その曲は現代音楽で、世界初演。観客も初めて聴くわけですけど、始まりは会場がばらばらに息をしているのが、途中から私の息継ぎと一緒になった時に、私の音を聴いてくれているって分かる瞬間があって、「やったー」と思います。作曲家も初演をその場で聴いていて、「途中から一緒に息継ぎしていたよ、みんな」と、喜んでくれました。人間は肺に空気を入れて生きている。その最大限原始的なところでやる音楽でしたので、そういう風にして私も楽しみ、みなさんも楽しんで下さったと思います。

**観る人の心を動かそうとして仕掛ける側の松井さんの思いはどういったものなんですか？**

松井: 美術館以外の空間や景色の中で作品を観せたいという思いがあったものですから、「どうしてこんなところにコレがあるの？」っていう反応がおもしろくて仕掛けたりします。私がムンクに出会ってびっくりしたように、意外な場所で突然出会う。より一層強烈な感動を覚えて頂けるわけです。

藤本: 水上ビルで開催したアートイベント《せぼね》ですよね。おもしろかったですね。

大野: 絵に限らず、今何が一番興味がありますか？

松井: 今は震災のことが気になります。美術に関連した部分だけでなく、どういう風に日本が変わっていくのかが気になります。価値観が変わりました。



大野: 芸術に反映するものでも傾向が変わってくると思います。

松井: 今年の星野真吾賞展でも、きっと応募作品に現れてくると思う。今は本当に震災のことで頭がいっぱいです。

**最後になりましたが、『風伯』はこの一年、「人はなぜ美を求め、美を感じるのか」というテーマを掲げてきました。このテーマについて、どのように感じておられますか？**

松井: 自身の気持ちを反映するものではないかと感じています。自分を見失いそうな時に、美しいものが観たいという思いで感動を求めたくなります。ただ美しさにもいろいろあって、その時々を感じる美しさは同じではありません。人によって美しいと感じるものも違います。でも誰もが美しいものを観たいと思っているのではないのでしょうか。

藤本: 美は生きる喜びそのもの、生きるエネルギーそのままだと思います。私は“心のごはん”という言い方をしますが、美もいつも一緒のものを求めているわけではなく、その時々自分の気持ちで一番おいしいものが決まってきます。刻々と変わっていく心が求めるものが、その時その人の美であるだろうと。同じ人でも、いつも同じものを美と感じるとは限らない。大杉栄は「美は乱調にあり、諧調は偽りなり」と言ってますね。生物学的なエネルギーが食べるご飯だとしたら、心のごはんは精神の大きなエネルギーになると思っています。

司会: 今日は本当にありがとうございました。

音楽を聴いて、絵を観て、感動する生き物は人間だけだろう。なぜ感動するのだろうか。感動してどうなるのだろうか。感動することのない人生はどんな人生なのだろうか。美を感じることの、各人各様の様々な経緯や取り組みを感じていただけたでしょうか。

次号からまた新しいテーマで特集を展開します。あなたの希望をお聞かせ下さい。

(風伯編集部)



## 美術博物館の展覧会

## 夏休み企画展「素材の冒険」

7月1日[金]～8月28日[日] \*7/1、2、8、9は20:00まで開館

近現代美術は多様な素材を用いてその表現世界を拡張してきましたが、平面絵画においても従来のスタイルを逸脱し、さまざまな可能性が模索されました。戦後、京都で興った美術グループ・パンリアル美術協会もその初期活動において素材のコラージュなどの実験制作を行っており、そうした志向は造形の成り立ちそのものを問おうとする、現代の作家たちへつながっていきます。戦後美術は素材との格闘の歴史といっても過言ではないでしょう。

本展は豊橋市美術博物館の収蔵する平面作品より、「紙」「布」「木」「土」「金属」などを用い、実験的・挑戦的な姿勢を持って表現の可能性を探求してきた作家たちの試み

を紹介するものです。また、土や木などの自然素材を用いる豊橋出身の造形作家・味岡伸太郎の作品を特別展示する1室を設け、その多彩な表現活動の一面を紹介いたします。夏休みワークショップや親子鑑賞会、子供向けワークシートなどを用意しておりますので、この夏はぜひご家族でお楽しみください。



不動茂弥「紋の板」



三上誠「暮B」

夏休み親子作品鑑賞会 7/23(土)、8/7(日)、13(土)、28(日) 14:00～

## 夏休みワークショップ

- ①味岡伸太郎(造形作家)「土の色であそぼう」 8/9(火)13:30～16:00  
 ②鈴木一正(日本画家)「絵の具をつくろう」 8/11(木)13:30～16:00  
 対象:小学生(定員各30名先着) 参加料:500円  
 申込み:7/5(火)より電話で美術博物館へ(TEL.51-2882)

## 二川宿本陣資料館の展覧会

## 開館20周年記念 棟方志功の東海道五十三次展

7月23日[土]～9月4日[日] \*月曜休館、ただし8/15[月]は開館

本展は、二川宿本陣資料館開館20周年記念として開催するもので、昭和31年にベニス・ビエンナーレ国際美術展において国際版画大賞を受賞し、「世界のムナカタ」として国際的評価を得ている棟方志功の世界を、《東海道棟方板画》全64点を中心に紹介します。

《東海道棟方板画》は、駿河銀行(現・スルガ銀行)の依頼により制作することとなったもので、棟方は昭和38～39年にかけて東海道を計7回も訪れ取材しました。

東海道は、京三条大橋を通らず大津から分かれて大阪へ向かう街道を含めて「東海道五十七次」と呼ぶ場合がありますが、《東海道棟方板画》も東京から大阪までが描かれ、「人間性を強く打ち出したい」という棟方独自の視点から各地の風物がとらえられています。

その他、棟方の最初の板画集である《星座の花嫁板画集》、典型的な棟方美人画である《門世の櫓》、最後の板画作品となった《捨身飼虎の櫓》など、棟方板画を語る上で欠かせない作品もあわせて紹介します。



「東海道棟方板画 豊橋」棟方板画美術館蔵

## ◎記念講演会

7/30(土)14:00～ 「棟方志功の芸術」金原宏行(豊橋市美術博物館特任館長)

定員:50人(先着) 聴講無料(入館料が必要) 申込み:7/5(火)9:30～二川宿本陣資料館へ電話で(TEL.41-8580)

会員証にて無料入館できます(年間=正会員・学生会員は3回、特別会員は6回、賛助会員は15回まで)。ぜひおでかけください。

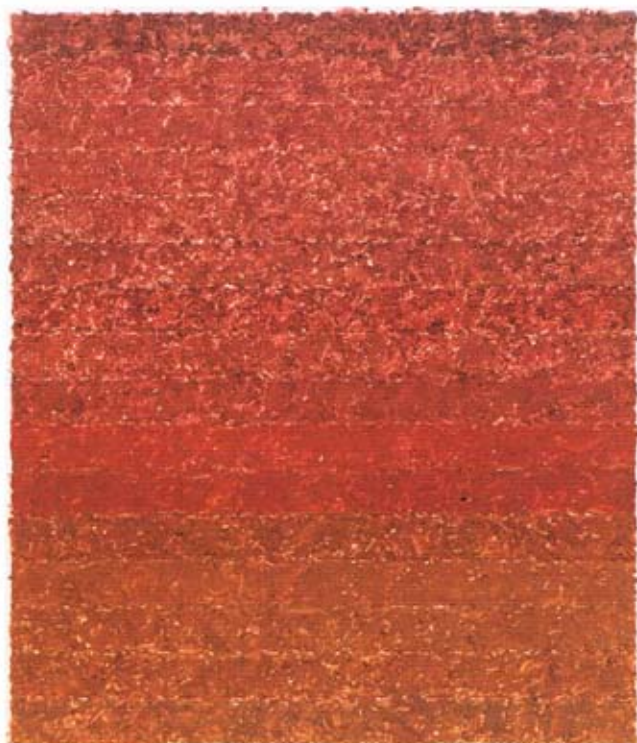


## 収蔵品紹介

## [東浜田地質調査 16-1]

味岡伸太郎 ● AJIOKA, Shintaro

1994年 麻布、ボンド・土 186.0cm×160.0cm



味岡伸太郎はデザイン業につく傍ら、木・石・土といった自然の素材を自ら採取し、提示するといったスタイルを確立した作家である。なかでも平面・立体・インスタレーション・陶芸など、多様な表現を可能とする土への取り組みは1994年より始められた。

東浜田の土を採取した本作品は、土を平面にストライプ状に配列した最初のものである。東浜田は豊橋市と田原市の境界のあたりで、むき出しになっていた地層が作家の目をひいたという。豊橋近辺の土は豊かな色相をみせ、奥三河の山や太

平洋岸、あるいは工事現場などが採取場所となった。その際には、たとえば絵の具を選ぶかのように色鮮やかな土だけを選ぶ、といった行為は行っていない。あるがままの配列を無作為に提示するというストイックな姿勢は作者が頑なに貫いてきたものである。それは「地質調査」という一見無味乾燥なタイトルにもあらわれており、何ゆえの調査か、そこに見出したものは、という問いはそのまま土の層を眼前にしたわれわれに突きつけられる。

とはいえ、無作為の土の配列は実に豊かな表情をみせる。土に含まれている小石や不純物がそのまま作家の手の下で自由に偶発的な軌跡を描き、結果として作品に絵画的な要素が付加される。それは目を楽しませるばかりでなく、土を踏みしめるときの音、触るときの感触、水を含んだときの有機的な匂い、といった五感への刺激へとつながっていく。決して不快な体験ではない。コンクリートやアスファルトで固められた窒息しそうな環境のなかで、のびやかに呼吸をしている土の在り様はわれわれが生物として安息を見出す場でもあるのだ。追記すると、当館に所蔵された「東浜田地質調査」には赤褐色の本作と灰色を帯びた砂地の16-2があり、1は地層の上部で2へとつながっていく。上から下へ、1から2へと視線を遊ばせることで、土の多様な表情に出会うばかりでなく、それだけの変容を促した気の遠くなるような時間の集積に想いを馳せることになるだろう。

本作は16-2とともに夏休み企画展「素材の冒険」に出品している。同展では土を用いた他作品のほか、石や木、金属を用いた味岡の仕事を紹介する1室も設けている。

(豊橋市美術博物館学芸員 丸地加奈子)

## 編集後記

今号の座談会に写真係として参加しました。三人のお人柄、楽しい会話までもカメラに収めたいと、撮影に臨みました。熱心に話されるのを聞いているうちに夢中になり、我が身に置き換え考えました。

私の脳にはどのくらいの残像があるのでしょうか。じっくり鑑賞するタイプでなく、これまで絵画に癒しを感じる事はなかったと思います。音楽を聴く時には、元気の出るジャズとか、しっとりとした室内楽とか、その時々で気分が違いますが、絵画にはただ刺激を求めるのみだったのか。あるいは外国旅行の時には、欲張りな行程に疲れ、美術館では活気ある絵を求めていたかも知れません。

座談会の終わりになって、「美に何を求め、感じるか」は、その時々で変わるのだと感じました。今回、専門家の方々に、芸術の探究についてお話を聞く事ができました事を感謝いたします。

(金田順子)

## 【表紙作品】

レンブラント・ファン・レイン 1606—1669

《鏡像を着けた女性の肖像》1644年 油彩・板 64cm×51.5cm

## 豊橋市美術博物館 友の会だより「風伯」第80号

編集・発行 豊橋市美術博物館友の会

会長 宮田正人

編集長 鈴木伊能勢

編集委員 神野能生子 福島陽子 金田順子

協力 豊橋市美術博物館

〒440-0801 豊橋市今橋町3-1 TEL.0532-51-2882

平成23年6月30日発行